ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　その日の夕食の時間。今日の夕食の当番は詠で、朝と同じテーブルの上は、中々に豪華になっていた。

「おいおい、どうしたんだ？」

　夕食が出来たという知らせを受け、部屋から出てきた俺の第一声がこれだ。食事代は月の初めに『ワルキューレ』から支給されるとはいえ、流石に中学生になったばかりの俺達に、そんなに大金は渡されないため、そう贅沢は出来ない。きちんと食事をしないと、後でお姉様直々のお説教が待っているのできちんと食べてはいるものの、それでも俺達の部屋のルールでは、一食一人分五百円以内に収める決まりとなっている。それを超えるのは、クリスマスや正月の時くらいだ。だが、今俺の目の前に広がっている料理は、明らかに一人五百円をゆうに超えている。ちょっと詠に一言言ってやらないとと台所に向かおうとした時、既に食卓についていたレイが、呆れたような顔で口を開いた。

「あのねぇロラン。あんた、今日が何の日か分かってる？」

「……たかが入学式があったくらいだろう？」

「そうじゃないでしょ？　『私達』は『無事』に『離れ離れになることなく』、中学生になれたの。これがどういうことか分かる？」

　途中、語を強めてレイが言うが、何か似たようなことを、今日の朝も詠から聞いた。そりゃあ、確かに危険な事が何も無かったかと言えば嘘になる。それでも、本当の危険に直面した事があるかと言われると、それも正しくない。近くにはマルクスさんを始めとした、『ワルキューレ』の名だたる実力者達が必ずついていたのだ。

　なので、俺達が中学生になっても、それは特別な事でも何でもないのであるが……

「……まぁ、めでたい事だってことは分かった」

　それをどう説明してもレイは納得してくれそうもないので、俺は取り敢えず、そう答えた。

「んー……ほんとに分かってる？」

「分かってる分かってる」

「嘘、絶対分かって――」

　レイが身を乗り出してそう言いかけた直後、残りの料理を詠が運んできて、やむなくこの話は中断された。

「……あれ、もしかして僕、邪魔しちゃいました？」

　そのまま固まった俺達を見て、困ったような様子で詠が首を傾ける。両手に持っている皿がプルプルと震えていて、ちょっと怖い。

「いや、別に邪魔なんてしてない――取り敢えず、その皿置けよ」

「私達も、運ぶの手伝おっか」

「あ、いえ。次に樹葉が運んでくるので最後なので、もう大丈夫です」

　立ち上がりかけた俺達を、詠は制す。すると、奥から樹葉が、小皿や醤油や箸箱をお盆に乗せてやってくる。

「あれ、二人共、どうしたの？」

　樹葉にそう聞かれ、俺達はそろって首を横に振って、改めて椅子に座りなおす。詠と樹葉も続いて椅子に座るが、怪訝な顔は崩さない。変な空気になってしまったのを振り払うように、レイがコホンと咳払いを一つする。

「えっ……と、皆そろったし、乾杯しよっか。皆、何飲む？」

「私、りんごジュースがいいな」

「僕も同じで」

「……オレンジジュース」

　それぞれがリクエストすると、レイがそれを注ぐ。なみなみと液体の注がれたグラスを手に取って、三人が高く掲げた。少し遅れて、俺もそれに倣う。

「えー、では、三人が無事に中学生になったことを祝って……かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「乾杯です！」

「……乾杯」

　グラスがぶつかる音が、あたりに響く。どうやら、俺以外の三人は、皆揃って中学生になれたことを、本気で祝っているらしい。やれやれと、俺は心の中で溜息を吐いた。

「ほら、ロランも！」

　樹葉が突き出すグラスに、俺は自分のグラスを軽くぶつける。なみなみと注がれたジュースが、グラスのふちから外に出ようとするが、ギリギリの所で踏みとどまった。ホッとするのも束の間。

「あ、僕とも」

「あー、次私ね」

　詠とレイが、俺に自分のグラスを突き出してくる。

「はいはい、順番な」

　再びやれやれと、俺は心の中で溜息を吐いた。

「そういやさ」

　料理もあらかた皆の胃袋に収まった頃、レイがジッと俺達を見る。

「三人は、もう友達出来た？」

「今日は入学式だぜ？　出来るわけないだろ……」

「えっ？　私、もう出来たけど？」

「あー……僕はまだですね。それどころじゃなかったです。でも、友達になれそうな人なら見つけました」

　どうやら、俺以外の二人は、学園ライフを満喫する気まんまんのようだ。まぁ、詠はいいとして――

「友達作るのもいいけど、一応任務だってことも忘れるなよ？　俺は怪しい奴を早速見つけたぞ？」

　日ノ下の顔を思い浮かべながら、俺は樹葉に向かって言う。皆の顔がキッと真剣なものへと変わることを期待した俺だが、目に飛び込んできたのは、どこか呆れたような顔だった。

「あ……あのね、ロラン。確かに怪しい人を見つけるのも任務の一つだけど、ちゃんと学校生活を楽しむように、とも言われたはずだよ？　そこのところ、分かってる？」

「いや……分かってるっちゃ分かってるけど」

　確かに、それもお姉様が仰ったことの一つではある。とはいえ――

「最優先すべきは、『ワルキューレ』のために、邪魔者を速やかに排除することだろ」

「でも、お姉様からは、そこら辺は『学校生活に支障が出ない程度に』とのことで……」

「それは勿論そうするよ。学問を疎かにするつもりは……」

「ねぇ、ロラン」

　いままで俺と樹葉のやり取りを黙って聞いていたレイが、突然口を挟む。

「あのね、学校生活って、何も勉強だけが全部じゃないんだよ？」

　諭すような口調で言われ、俺は思わず黙ってしまう。そんな俺の肩に、詠がそっと、手を乗せた。

　言わんとすることを悟った俺は、首を縦に振って、口を開く。

「……分かったよ。友達もちゃんと作る」

「そう。それでよろしい！」

　ニコっと笑ったレイに、それでも、と俺は続ける。

「怪しいやつを見たのは確かだからな。俺の隣の席の、日ノ下海斗ってやつだ。お前も見てみてくれ」

　樹葉の方を向いて、俺は頷く。困ったような顔をした樹葉も、ちょっと考えて、コクンと頷いた。

　その時だ。

　突然、ブゥーっという、耳障りな機械音が、俺達の部屋から聞こえる。警報だ。今度こそ、皆の顔が、真剣なものへと変わった。のだが――

「やれやれ、この後、デザートがあったんだけどなぁ……」

「レイちゃん、まだ食べる気？」

「食いしん坊ですねぇ」

「おい、そんな事言っている場合じゃないだろ」

　緊張感の無い会話に、俺は思わず突っ込んだ。改めて、三人は顔を引き締める。

「きっと、いつものやつでしょ？　皆、五分で準備して、ここに集合！」

　レイの指示に、二人は頷いて、それぞれ自分達の部屋に入る。俺も、ちょっと遅れて、自分の部屋に入った。

「さて、と」

　俺達の部屋には、手の平サイズの小さなタブレットが壁に掛かっている。あの耳障りな警報は、こいつが鳴らしているのだ。

　このタブレットは『 』、略して『ＩＣＣＴ』と言って、『ワルキューレ』からの連絡用のツールである。随分昔は、携帯電話やスマートフォンなるものが、こいつの代わりだったらしいが、それらの電子機器は『トラース』には持ち込めない。当初は向こうにある素材でそれらを作ることも考えられたらしいが、当然『トラース』には無線基地局やＷｉＦｉなんてものは存在しないので、結局それらを作れたとしても通信することは不可能である。根本的な解決にはならない。そんなものを勝手に作れば、他のチームからの非難や制裁を受けることは避けられないからだ。必然、むこうでの連絡手段は手紙――鉛筆の代わりになるものはあった――なり伝聞なり古風なやり方に頼る他なく、これは他のチームも同様だ。それ故、手軽な連絡機器の開発は、今も尚、どのチームも最重要課題としている。『ワルキューレ』と、他数チームを除いては。

　見つけることが出来たのは、全くの偶然だったらしい。『ワルキューレ』の研究員がフィールドワークに出かけた先で偶然、『ＩＣＣＴ』の通信機能の中核となる金属を発見し、こいつが作られた。その金属は『ペア・メタル』。名前の通り、二つで一組の金属である。

　俺は、タブレットの横についている、片耳だけのインカムのようなものを、右耳に掛ける。ここに使われている金属が、さっき言った『ペア・メタル』の片方だ。『ペア・メタル』は、人間の耳の裏から脳から発せられる微弱な電波に反応し、対となる『ペア・メタル』に電波を送る。要は、こいつらが携帯電話やスマートフォンでいうところの、無線基地局やＷｉＦｉの代わりとなるのである。まぁ、正確には、『ペア・メタル』同士は、有線ケーブルなしで電波のやりとりをしているので、厳密には無線基地局とは違うのだが、素人目からすればどうでもいいことだ。

　ただし、素人目にも問題なのが、電話が出来ないということと、電波の受信させたい相手を選べない、ということだ。『ペア・メタル』は一組しか発見されてないが故、全員の端末に、同じ金属が使われている。要は、俺が送ったＡという情報を送った場合、その情報は『トラース』内でタブレットを持っている全員に行き渡る。例えば、俺が仮に――勿論、こんなことはありえないが――樹葉に愛の告白メールを送った場合、それはレイや詠、その他『トラース』にいる『ワルキューレ』メンバー全員がそれを見ることになる、というわけだ。なので、この端末を『トラース』に持っていくと、場合によっては、ひっきりなしにメールを受信するので、相当にウザったい。それでも、手軽に連絡が出来るのと出来ないのでは、情報の伝達に大きな差があるので、あまり贅沢も言えないのだが。

　幸いなのは、こっちではこっちの回線を使っているので、ちゃんと電話もできるし、メールは個別に届いてくれることだろう。とは言え、その恩恵は、俺にはあまりないのだが。

「……やっぱりか」

　俺は、タブレットに届いた、上の方々からの出動命令のメールを見て、そう呟く。さっきも言ったように、欠点はあれど、手軽に連絡をとれる携帯機器は、どの『チーム』もこぞって欲しがっている。どこかの『チーム』がその中核となる貴重な金属を独占しているとなれば、他の『チーム』は襲ってでも手に入れたい物だろう。それは、『ワルキューレ』も例外ではない。他の独占している『チーム』をこちらから襲うということはないが、まだ持っていない『チーム』から襲われるということは当然あるのだ。

　勿論『ペア・メタル』の採掘場所は、『ワルキューレ』の機密事項の一つで、俺もどこで『ペア・メタル』がとれるのかは知らない。『かつて採掘できた場所』なら幾つか知っているが、一度、採掘出来る場所を見つけたら、その日のうちにそこにある『ペア・メタル』は全て掘り出してしまうので、そんな情報は意味をなさないのである。

　そういうわけで、他の『チーム』が『ペア・メタル』の採掘場所を見つけることは、余程の事でもない限りないのだが、どういうわけか、たまに機密情報がどこかから漏れたりして、採掘場所を襲撃されることがある。

　そこで、俺達の出番だ。

　数多くの種類がある任務の中でも『トラース』がらみの任務のほとんどは、襲撃してきた奴らを追い返すことである。特に、俺達みたいな新人の遂行する任務は、基本的にこれ一つだ。そして、今回もこれである。

　メールの内容を一通り確認した後、俺は戦闘用の衣服に着替える。流石に『鎧』には劣るものの、『衣服』といっても普通の衣服よりは打撃耐性は高いし、何より『鎧』より軽いので、俺は戦闘の時はこっちを愛用している。白を基調とした、背中に黒いラインが肩から腰の辺りにかけて『Ｘ』の字に入っている長袖のシャツに、紫色のパンツをはく。タブレットをポケットに突っ込んで、壁に掛かっている二本の愛刀を腰に装着し、白と黒のリバーシブルマント、今は黒い方を表に羽織る。

「……よし」

　そして俺は、机の引き出しから、コンタクトケースを取り出す。中に入っているのは、真紅のカラーコンタクトだ。カラーコンタクトと言っても、一般的なカラコンとは違って、目だけでなく、視界まで真っ赤に染まる。

　俺が研修所から出てきて、自分の事について真っ先に調べたことは、『ＰＴＳＤ』についてのことだ。正式名所は『心的外傷後ストレス障害』という。症状は、研修所の友美さんが言った通りだ。俺の場合、血を見れば酷いパニックに陥る。そしてこの病気は、未だ治っていない。一応、定期的にカウンセリングは受けているのだが、あまり改善した様子は無い。

　研修所でロボットと戦った時、俺は自分自身の血を目に入れて、視界を無理矢理に赤く染めることで『ＰＴＳＤ』を克服した。というより、『カラーセラピー』が『ＰＴＳＤ』を上回った、と言うべきか。どうやら、視界が赤いと、俺の脳は血を血と認識しないらしい……のだが、当然のことながら、あんなことが毎回出来るわけではない。血を目に入れるために、自分自身を傷つける必要があるし、何より目に入れる際、血を見る必要があるからだ。あの時は偶然にも、右目に血が入ったから、左目で血を見ても、恐怖は半減したようなのだが、そんな偶然は、狙って起こせることではない。

　それ故の、こいつなのだ。『呉服屋中村』の店長に、無理を言って作ってもらった。

　俺はコンタクトケースを、タブレットとは反対側のポケットに入れて、部屋を出た。

「お、ロラン。準備はいい？」

　俺が部屋を出たときには、既に全員が揃っていた。レイが、片手をヒラヒラとさせる。

「マルクスお兄様は後からすぐ来るみたい。先に行ってろってさ」

「……了解」

　俺は頷く。レイは黄色と白を基調とした、スカートみたいなヒラヒラとしたものがついているスパッツ状の戦闘服を身に纏い、手には、俺の愛刀と同じくらいの長さの、黄色と銀色を基調としたを持っている。なんとこのハルバード、俺の『ヘヴンズ・ギア』と同じくらい重いのだ。

　ちなみに『ワルキューレ』の女性は、男性の先輩を、年齢に関わらず『お兄様』と呼ぶ決まりになっている。

「『トラース』に行くのって、何ヶ月ぶりだっけ？」

「最後に向こうに行ったのは……確か、二ヶ月前だったかと思います」

　樹葉と詠が、俺の後ろでそんな事を話している。

　樹葉は、明るい緑色のロングコートにグレーを基調とした深緑色のチェック模様のスカートをはいて、手にはサーチャーのついた弓を持っている。俺達の刀や斧槍の半分くらいの大きさしかないので、やけに小さく見えてしまうが、あの弓から放たれる矢の威力は中々のものだ。

　詠は、黒を基調とした水色のラインの入ったワンピースを着て、ダークブルーのアンクレットとチョーカーをつけている。俺達とは違って、武器らしい武器は持っていない。彼の役目は、作戦の指揮だからだ。そのため、彼の手には俺達のタブレットよりもかなり大きいタブレットが握られている。

「よーし、準備完了！　じゃっ、皆行こう！」

　俺が二人の格好をまじまじと見ている間に、レイは『トラース』に行く準備を整えたようだ。

　俺達が『トラース』に行くには、二通りの方法がある。一つ目は、地球上のどこかにある『トラース』に通じる空間の裂け目を通ること。『トラース』は、こいつの存在があったが故に発見された。

　二つ目の方法が、今レイが準備した方法だ。全『チーム』に渡された、『アップロード・メタル』を使うやり方である。こいつに電流を流すと、『トラース』にある『ダウンロード・メタル』の所に通じる、空間の裂け目を無理矢理作ることが出来る。どこに通じるかは『ワルキューレ』では上の方々にしか分からないので、俺達が好き勝手に行こうとすれば、あっという間に『トラース』で迷子になる。

　今、目の前には真っ黒い空の下、広大な草原が広がっている。俺達は、そこに足を踏み入れた。